NO、43（通算２１７）

絵・文・題字
渋谷　一夫

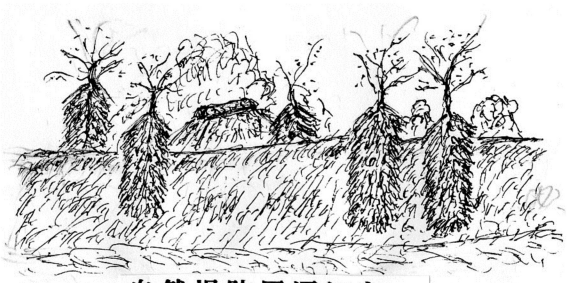
ハンノキのある村

太宰治は「富嶽百景」の中で「富士には月見草がよく似合う」と書いている。私は「南畑にはハンノキがよく似合う」と言い換えたい。

昭和も中頃までは、南畑の民家の周りには、必ず数本のハンノキや竹林があった。当時は自給自足の時代、建材・農業資材・生活用材・燃料などに必要不可欠な植物だったのである。

奥貫友山の知恵

南畑周辺は湿地帯で米作りには最適だったが、良質な建築資材や生活材が少なかった。そこで、久下戸の名主・奥貫友山は、低湿地に適した良い植物はないかといろいろな資料を調べた。その結果、ハンノキは成長が早く、建材・燃料に最適なことが分かった。早速、ある地域から苗木を取り寄せ植樹した。それが評判となり、我も我もとあちこちに植えられ、爆発的に広まったといわれている。（資料・稲植保美氏）


自然堤防周辺にも、ハンノキに藁ぼっち

ハンノキは、豆科の植物と同じように根に根粒ができ、根粒バクテリアの働きで空中の窒素を固定する。だから、どんどん育つ。窒素肥料が自然に補給されるのだ。

生活を支えた木

高度経済成長期に入る昭和40年頃までは、農家の周辺には、必ずハンノキや竹林があった。これは当たり前の情景で、南畑の風物詩でもあった。

ハンノキは、成長が早い。アッという間に20、30㎝の太さになる。枝を下ろせば良い燃料だ。幹は、生きたまま藁ぼっちの主軸になる。稲を干す稲掛けの支柱にもなる。また、冬の空っ風を防ぐ防風柵の支柱にもなる。さらに、建材・土木用材など用途は広かった。資材不足の折、貴重な樹木だったのだ。

ハンノキに藁ぼっち

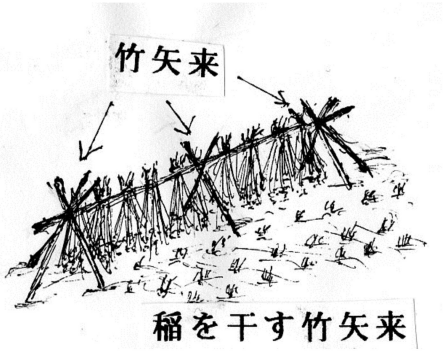
竹も重要な生活材

昔は、どこの農家も、屋敷の片隅に竹林があった。私たちは竹山と呼んでいたが、この竹が生活資材・農業資材として大活躍したのである。

稲掛け用の竹矢来、垣根用材、ざるや籠などの農業資材、物干し竿など多方面に重用された。竹馬や竹トンボ、笛など玩具用にも多用された。竹の子は食用に、その皮はおむすび包装や工芸品の材料に重用された。

南畑にある竹はハチクかマダケがほとんどで、どういう訳かモウソウチクは少なかった。

だが、その竹山も次第に姿を消し、南畑の風物詩も少なくなり寂しい。



稲を干す竹矢来